

(一)

大 学 人

友 定 賢 治

「大学人」ということばがある。大学の教員に特別のありようを求めたところから生まれたのであろうか。辞書(『広辞苑』など)には載っていないが、世俗のことや大学内での地位に関心がなく、いわゆる政治力もなく、みずからの研究に専念し、学生指導も研究面だけに限定しているような人物がイメージされていよう。我々にとつては、評価のキーワードにもなっている。この枠から外れたとみるや、「大学人らしくない」という厳しい評価がなされるのである。

武田ミキ学長は「大学人」であつたのだろうか。広島文教女子大学でお世話になつていた十四年間、いろいろな場面に接するたびに、「ノー」の答えを出し続けていたようにも思う。「大学教育」をどのように考えておられるのか、「学長のありよう」をどのように考えておられるのか、などの疑問をもつことは多かつた。ある演習の時間、

一、大学人としてともに生きて

小グループごとに意見をまとめるための議論をしている時、教室がうるさいと注意されたことがあった。その姿勢には学生も啞然としていた。また、こまごまとした注意のしかたにも反撥を感じていた。式辞・挨拶にも、不満を感じるが多かった。

このように学長を否定することは、たぶん簡単なことなのだろう。そもそも否定する観点として無意味なのかもしれない。しかし、どうしても否定しきれないのである。

大学というものがすっかり変わってしまった現在、典型的な「大学人」というだけで通用するのか。しないとなれば、新しい「大学人」とはどうあるべきなのか。この問題に自分なりの解答を出しておくことは我々の義務でもある。そして、考えていこうとするとき、学長の生き方をどのように自分の中に位置づけるかというのは、避けて通れないのだと思う。

学生運動時代に糾弾されたのは、学生を無視する専門馬鹿ではなかったか。偏差値が一点でも高い学生を受け入れようとするのも、一つには教師が育てなくても自分で育つという期待からである。手がかからないという期待である。教育は研究とは別のもの、学生とは仕方なく接するのが「大学人」という、暗黙の了解のようなものが厳しく問い直されているのである。

学問だけで学生をひきつけることは、たぶん相当に難しい。教師の人間的魅力が問われるはずである。学長が我々に研究だけではだめだと言い続けておられたのは、この点なのだろう。学生の無作法を嘆くことはたやすいが、その学生にどこまで真剣に接しているのか、学生をひきつけるどのような人間性があるのかを自らに問うとき、反省することはかなりである。大学生だから、大人だからというので、いかに多くのことから逃げて来たかを思うと恥

ずかしい。

「大学での教育」という話題が重要性を増している現在、学長の姿勢は大きな意味をもって我々の前にあると思う。毎日、どの学生に対しても同じことを言い続けた学長のすごさを思うのである。学長という立場でなく、一教師として学生に接することを、生涯望んでおられたのだと思う。市民病院に入院しておられたとき、横山先生についてお邪魔したことがあった。まだ覚えていて下さったことにも感激したが、毎日、一日中でも、学生の通学する姿や大学が見えるところにいらつしゃると先生からお聞きしたときの感動は身体が震えるほどだった。事実、そのときおられたのも病室ではなかったのである。

学長が亡くなられてから一か月、大学教員としての自分は、大学とは何か、大学人とはどうあるべきかを改めて考えていくなかで、学長の存在をどうとらえればよいのか、思い悩んでいる最中である。今後の自分の生き方を考えるうえで、結論を急がないでおきたいが、一つだけ、既に結論として得ているのは、学長が示してこられたような姿勢がなかったら、私立大学は「大学」として存在することはないであろうということである。その意味では、典型的な大学人であったのだ。

幸いにも四月からは再び勤務させていただけることになった。新しい本学のありかたは、学長が作ってこられた大学像をどう評価するのかということから始まるはずである。多くの方と議論していききたいと思う。そして、このような課題を、自らの生き方を通して与えて下さったミキ先生の存在の大きさに、改めて畏敬の念を感じるのである。

合掌。